

三宅
発

東北に支援の輪

社協などが派遣活動を展開



被災地に届けられた旗(都内の保育園児が制作)

議員視察も実施
8月15日現在、三宅島社協は5人のボランティアを南三陸町避難所などに送っている。島内すり

身活動は19人が参加。また村会議員7人も、8月20日から22日に現地での視察を行った。
7月9日からのボランティアと議員視察の両方

三宅島民やふるさとネットのメンバーが、8月に東日本大震災の被災地でボランティア活動を実施。また村議による視察も行われるなど、三宅島の被災地を結ぶ支援の輪が広がっている。

イベント紹介

10月2日に青空フェスタ



昨年の青空フェスタ

10月2日の神楽坂青空フェスタに、三宅島物産店を出店します。くさやや明日葉に加え、天ぷら等の実演販売も行います。是非お越しください。

島市 25日に阿古漁協で



好評のネット島市

9月25日、午前11時から阿古・漁協駐車場で開催される「島市」(主催三宅島活性化協議会・事業主体商工会)にふるさとネットも出店予定。お待ちしております。

浅沼徳広議員は、「現地を見ない」と同行した。同行した



陸前高田市での瓦礫撤去

とわからないことが多い。多くを学んできた。島も津波被害を受ける地域があるので、教訓を生かしたい」と語った。

大石事務局長は、「震災のもたらした被害の大きさを知るとともに、それでも前を向いて歩む現地の人の心の強さを感じた」と語った。

ネットからは二名が

ふるさとネットでは、8月10日・12日まで、大石事務局長と長嶋氏が向の上学園の生徒ボランティアに同行し、岩手県の大古、釜石、大槌、陸前高田で支援活動を行った。

三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと再生ネットワーク
〒100-1101
東京都三宅島三宅村神着 320-2
Tel. 090-4922-0798
発行人：会長 佐藤就之

事務局便り

○第24回世話人会開催
9月12日(月)
18時30分～
巢鴨ルノアル会議室

○訂正とお詫び
7月1日発行の34号1面の富賀神社大祭の地区名、坪田を「阿古」。阿古を「坪田」に訂正。関係者等の皆様にお詫びします。

○ご寄付のお願い!

郵便 振替口座
口座番号：00120-3-545036
口座名称：三宅島ふるさと再生ネットワーク

【三宅島ふるさとネット事務局】

郵便番号：173-0005
住所：板橋区仲宿 25-6
電話：03(3963)5678
FAX：03(3963)5697
担当：大石・加藤

村議会議長 佐久間達己さん

足もと見つめて

三宅村議会議長の佐久間達己さんに、2000年噴火の寄稿をお願いした。東日本大震災に、被災経験者として大きな衝撃を受けたことにもふれながら、地域再生のためには、行政がコミュニティの崩壊を防いだり産業復興をサポートしたりするのが必要なこと。そして、それ以上に住民同士の絆が大切であることを強調している。

当時の記憶たどりながら

今年3月に起きた東日本大震災と大津波そして原発事故は、被災者の



83年は成功モデル

83年の噴火では幸いにも人的被害はなかったものの、阿古地区400世

83年噴火で溶岩に埋まった
阿古小・中学校（上）と
2000年に噴火した雄山

帯を超える家屋が埋没しました。この災害対応として東京都からの派遣職員を中心とした「災害復興課」が設置され、被災村民との協議を重ねたうえ、地域コミュニティの崩壊を防ぐために、主たる仮設住宅は阿古地域内に、学校や集会場も併設して一箇所建設されました。

この判断は地域住民の連帯感や復興への意欲を増幅する意味でも非常に的確で、地域にこだまする木槌の音は復興に向かう確かな応援歌として心に響き、もちろん被害の少なかつた地域の方々の支援も大きな心の支えとなつて再建を目指した結果、仮設住宅入居基準の

これは当時の災害対応の成功モデルとして非常に評価も高かったと記憶しています。

守れなかった地域社会

私はこの教訓から00年の全島避難の際にも「コ

ミニニティを崩さない集中的な居住」を求めました。すでに自主避難した世帯や都営住宅への分散居住に合わせ、短期で帰島できるという樂觀的な見通しにより実現できなかったことが今でも悔やまれますが、その後の中越地震の山古志村(旧)全村避難でその教訓は生かされました。

時を移し、00年噴火災害からの長期避難解除による帰島時には2ヶ所の高濃度地区（居住制限）が設定されました。これは当時の判断として否定しませんが、行政と該当地区住民とのコンセンサスが万全であったという評価は残念ながら出来ません。

またそれを象徴するよう
に坪田高濃度地区の対
象住民の一部が都内に留
まったり、帰島した村民
も各地区に点在する村営
住宅に入居するなどの分
散状態が長期に続いたこ
とも、いまだ地域再生へ
のプログラムが固まらない
要因のひとつではない
か。かと思ひます。

2000年噴火の課題を考える

大切な住民間の絆



坪田・役場庁舎や商工会事務所等が戻るのはいづ



かさ上げ事業が頓挫した三池地区

佐久間さんプロフィール



- ・三宅村議会 議長
- ・昭和38年生まれの48歳
- ・29歳で三宅村議会議員選挙に立候補して初当選を果たす（現在5期目）
- ・副議長5年（04～08）、議長3年（09～）在職中。
- ・家族構成は、妻、息子（1）、娘（2）の5人

課題残る高濃度地区対応
高濃度地区のひとつであり、島内有数の農業振興地域である薄木地区は約2年前に規制が解除されましたが、経年による

農地の荒廃が著しかったために農業再開に向けた支援（農地リフレッシュ事業・農業用貯水ダム復旧事業など）が実施され、少しずつではありませんが、活気が感じられる

ようになりました。しかし三池・沖ヶ平地区は火山ガスの噴出量低下に鈍化がみられるため、今春より特別措置として通年居住が可能となったものの、いまだに生計を営むための事業（商店・民宿等）禁止という高濃度地区としての基本規制は継続されている状況にあります。

行政において高濃度地区解除を想定し計画した「三池地区かさ上げ事業」も頓挫し、地域再生に向けた具体的な提案も

ない状況下で帰宅を選択した世帯が少なかつたことは、長過ぎた年月の影響というよりは、地域とのコンセンサスもなく突然に行政主導で居住のみ解除した施策に問題がなかったか反省すべき事項であると思います。

またこの地域にある役場庁舎（現在は旧阿古中学校にて仮庁舎）は職員や来庁者への健康影響懸念のため再開できず、更には海・空の玄関口（三池港・三宅島空港）があるものの、火山ガス影響下の乗下船や30%に満たない飛行機の低就航率は、観光立島を目指す本島にとつてはマイナス要因が多く、その解決（改善策）にどう対応するの

かも行政の大きな課題となっています。

将来の災害に備えるため

このように00年の噴火災害から実に11年という年月で失ったものを取り戻すのは簡単ではなく、人一倍の汗を流す以外に方法はありません。行政の役割として住民

の声を反映した指針を示すことは当然であります。が、肝要なのは被災住民自身が共同しての地域再生に向けた協力（努力）をすることです。しかし必要でありませう。しかし帰島以降、徐々に行政と住民とのコンセンサスを得る場である行政懇談会場で空席が目立つようになったことが残念でなりません。

83年被災当時、毎日のように仕事が終わると被災者が集會場に集まって行政と議論しながら地域再生の姿を作り上げていった光景を今でもはつきり覚えています。時代が変わったとはいえ根底にある人間力と火山島に生きる島人としてのプライドは、きつとDNAとして子々孫々に受け継がれているものと強く信じています。

最近「絆」という文字を目にする機会が増えました。不安定な情勢だからこそ、しっかりと足元を見つめ直そうじゃありませんか。将来の災害に備えるためにも…。

世話人会 7月9日に 訪問活動などの議論を

7月9日、巣鴨にてふるさとネットの第23回世話人会が開かれ、以下の協議が行われた。

- ①在京者は高齢化し、家族と一緒に暮らし始めた方や、亡くなった方が出てきている。秋頃までに効果的な訪問活動の在り方を検討する。
- ②10月2日に開催される予定の神楽坂青空フェスタに三宅島物産店の出店を決定（1面関連記事）。
- ③「ロック～わんこの島～」試写会報告（この面に記事）。
- ④向上学園の岩手ボランティアに、大石事務局長等の参加を決定（1面に報告記事）。

【ご寄付者名】

株式会社キタジマ様、倉持房枝様、高橋民夫様、M様、櫻田薫様、広部敏政様、谷原和憲様、吉野文雄様、吉田信行様、横井和之様

【震災義援金ご寄付者名】

株式会社キタジマ様
（6月1日～7月31日）
ありがとうございました。



8月に島を訪ねた際の記念撮影

編集後記

「ロック」が公開されたことは、多くの人が当分の間は、多くの人が知っている。8月に島に私たちが、8月に島に行きました。豊かな自然や人情にふれ、心豊かになりました。今後も復興の行方を見ようと思ひました。（DTPA一同）

様々な思いを胸に

「ロック」の試写会に多くの在京者が

三宅島の噴火から帰島までの状況を題材にした映画「ロック～わんこの島～」の試写会が7月3日に有楽町朝日ホールで行われた。この試写会には、ふるさとネットの案内に応じた在京者など約50人参加した。懐かしい噴火前の島の風景や、全島避難当時を再現した映像が流れる中で、参加者は頷いたり、時には涙を流したりしながら映画に見入り、上映終了時には、会場に大きな拍手が響いていた。この面では、そんな方の試写会に参加した方の思いを、上映終了後に取材して掲載した。

希望を東北に伝えたい

葛西多可良さん（68・神着）



噴火から11年たっていますが、最近のように感じられました。三宅島はまだ復興の途中ですが、徐々に風化してきているため、この映画で思い出してもらえんと思います。

また、ロックとその家族のように、離れ離れになった家族も再会できるという希望を、東北で被災された方々に伝えたいです。

わかった 主人公の気持ち

杉原まり子さん（62・伊豆）



映画の中で島民が島から避難する場面では、大人と子どもそれぞれの様子や心境がとてうまく描かれていて、当時のことを思い出しました。

伊豆の家は、少しずつ片付けを進めていますが、なかなか進んでいないのが現状です。帰島して初めからやり直していく主人公たちの気持ちがわかり、共感できました。

考えること いろいろと

小室知美さん（24・坪田）



島に犬を飼っている友人がいました。避難当時、その友人がとても辛い思いをしていたのを側で見ていたので、それを思い出すと他人事とは思えず、今回の映画はたいへん感動しました。

また、それだけでなく、この映画を見たことで三宅島の現状やそこで暮らす家族等についてもいろいろと考えさせられたな、と感じました。

また家族と一緒に

小室美幸さん（54・坪田）



子どもたちが先に避難したことや長かった避難生活を思い出し、感じるものが多くありました。

主人は島に帰っていますが、子どもたちは学校の都合などで、すぐに帰るというわけにはいなくなっていました。離れ離れの生活が続いていますが、いつか島に帰り、また家族と一緒に暮らしたいと思っています。